



Title	開拓部落における連帯性の測定
Author(s)	金田, 弘夫; KANETA, H.
Citation	北海道大学農経會論叢, 15, 63-83
Issue Date	1959-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/10773
Type	departmental bulletin paper
File Information	15_p63-83.pdf



開拓部落における連帯性の測定

——フェスラーの測定尺度の適用とそれによる分析——

金 田 弘 夫

目 次

- 一、序 説
- 二、D. R. Fessler の Community Solidarity の概念とその測定方式
- 三、開拓部落への適用とその測定結果
- 四、「連帯度」の算定による結果の分析
- 五、結 論

一 序 説

一九五二年、米国の Virginia Polytechnic Institute の所員、Donald R. Fessler が『Rural Sociology』誌に発表した「共同社会連帯 (Community Solidarity) の測定尺度の展開」と題する論文⁽¹⁾は、農村共同社会における連帯性を一つの社会的事実として測定的に把握し、これによつて農村共同社会の社会学的特色の一斑を比較・検討しようとする試みとして、極めて興味に値する労作の一つであつ

た。それによると、フェスラーは、「一次的な農村共同社会 (primary rural community) は、それ自身の社会的行動に対して、一連の価値観念と共通の規範とを所有する社会集団として機能する」(c) という E. J. Hiller の展開した命題に立脚し、この共同社会連帯測定の理論的根拠と可能性とを与へている。即ち、対面的接触関係の優位をもつて特色とする農村にみられる小地域社会の如きにあつては、或る程度慣習化されたその社会に固有の価値観念や共通の行動規範が存在するが、これに対して、その構成員が内面的に保持する或る程度の合意(肯定・否認)による一致感が連帯性測定のもチーフとしてとられるといふのである。従つて、コミュニティーに特有の価値観念や行動規範の或る点に於て、人々の間に強い意見の集中がみられる時は、当該コミュニティーにおける連帯観念は強く大きいが、逆に意見がばらつくときは、その社会集団には統一性がなく、小社会集団としての機能も劣り、連帯性にも欠除しているとみられるのである。フェスラーは、かかる方法論的基調に基き、周到なる実験計画の樹立を試み、これに必要な統計学的アレンジを施すことによつて、独自の測定尺度を構成し、Community Solidarity 測定の指針を明らかにしたのである。もつとも、彼によれば、「それはもともとアイオワ州に於ける第一次的農村コミュニティー内部の連帯性の程度を計測する為に作られたものであつて、その指標 (index) は完璧な道具として呈示されるものではない。恐らくそれはコミュニティーを計測的に調査せんとする者にとつては明らかに欠陥を有するものである。しかし、考慮を加へて行けば非常に役立つべき性格をもつたものとなるであらう」(3) とのべて、この尺度に対する自己批判と効驗の一端をほのめかしているのであるが、いずれにせよ、彼のこの労作は、農村社会の研究に関心を抱くものにとつて、見逃すことの出来ない興味ある企図の一つと思はれる。

所で、連帯性といへば、吾々としては、コント以来、社会学の歴史と同じだけ古い、かの伝統的な「社会連帯」の概念を想起せざるを得ない。しかるに、この伝來的な社会連帯の概念と、フェスラーのコミュニティー・ソリダリティーの概念との間には可成りの距離があるのであつて、これを同日に論ずることは出来ないのである。従つて、其処には当然、概念構成上の理論的諸問題が提起されるのであるが、それと共に、等しく、一次的接触関係の優位をもつ特色づけられる「開拓部落」を素材に求め、これを対象として、フェスラーの測定方式を適用した場合、一体如何なる結果と問題とが生れるであらうか。このことも当然吾々の興味をそそる問題として提起せざるを得ないのである。とくに後者の如き設問を試みた場合には、(一)その測定のプロセスに於て如何なる問題が派生するか、(二)その測定の結果とし

て、開拓社会の連帯性には如何なる実態上の特色がみられるか、(ii)従来論ぜられて来た社会学における社会連帯の諸理論との関連に於て、この計測的な社会連帯の測定尺度は、果して如何なる意義をもつているかといふ一連の問題を設定することが出来ると思はれる。勿論これ等三つの問題点は互に関連を有する一つの問題についての三つの側面であつて、どの側面もこれを軽視することが出来ないのである。

しかし乍ら、本稿において、この第一の測定プロセス上の手続的問題については、フェスラー自身が可成り慎重な統計学的操作を施し、一応尺度のブレレンジを試みているから、この問題を別に取扱つてよいと思ふ。むしろ第二の具体的に現実社会にこの尺度を適用した場合、一体如何なる結果がもたらされるであらうかといふ問題に、重点をおき、これを本稿における中心課題として考察を進め、第一、第三の問題については、それに必要限度の範囲内において触れることが、ぞましいと思ふ。問題をこの様に限定することによつて、差当り、フェスラーの連帯性測定の方法が如何なるものであるかを概観しなければならぬが、本稿の中核課題は、それよりはむしろ次の点におかれることになる。即ち、若干の項目修正の後、吾々が一九五三年より一九五八年に到る迄六カ年間に亘り、北海道における七つの開拓社会と四つの既存農村において実施した測定調査の結果が如何なるものであつたか、これを明らかにして、更に若干の分析と批判を試みる事である。従つて本稿は調査の要領と結果についての素描に終るきらひがあるが、一先ずこれをもつてフェスラーの測定論に対する実験的省察とし、また本道開拓社会における連帯性を繞る諸特色を比較検討する手がかりとし、爾後の研究の指針に供したい。

註(1) Donald R. Fessler, "The Development of a Scale for Measuring Community Solidarity", *Rural Sociology*, 1952 June, Vol. 17, No. 2.

(2) E. T. Hilder, "The Community as a Social Group", *American Sociological Review*, 1941, 6: 189-90.

(3) D. R. Fessler, *op. cit.*, p. 145.

二 フェスラーの Community Solidarity の概念と、その測定方式

フェスラーの Community Solidarity (共同社会連帯) の概念は、法律学における連帯責任や、デニギーの法学的社会連帯の概念とは

全く異なる。そればかりでなく、古くから社会学において問題とされて来たコントやデュルケムの社会連帯の概念とも可成り趣を異にしている。法律上の連帯の概念にしても、レオン・ブルジョアやデニギーの連帯主義にしても、或いはコントやデュルケム、マッキーバーの如き社会学者の所論にみられる社会連帯の概念にしても、その所論における表現こそ異なつてはいるが、いずれにせよ社会成員間にみられる或る相互依存の関係をさして社会連帯であるとするところに一つの共通の基調が視へる。しかも、この連帯的な相互依存はあくまでも社会学的要因によつて成立するものであつて、たとえば道徳的連帯感の如き甚だ主観的な連帯にあつてすら、それは社会成員の社会的相互作用の過程において論ぜられるのが常である。しかるに、ヒラーの社会集団についてのテーゼを拠り所としてたフェスラーの「共同社会連帯」(Community solidarity)の概念にあつては、彼自身必ずしもこれに対する明確な定義を施していないけれども、その所論の全体を通じて視へることは、この概念が著るしく社会心理学的性格が強いといふ事である。或る小コミュニティーのメンバーが(或いは家族の如き集団が)、その社会に特有の価値観念と社会的行動規範を中核として群つて居るときは、そのコミュニティーの連帯性は高く大きい、意見がばらつくときはそのコミュニティーの社会集団としての機能は劣り、また連帯性にも欠けているという時、其処に見られる社会的事実、成員の意識的統一性或いは社会心理学的な社会的凝集という集団意識の力学的側面であつて、そのことが直ちに社会的相互作用としての社会連帯にはならない。従つて、今もしこの様な意識の態様をもつて社会連帯をあらはすものであるとする為には、社会連帯を「連帯責任」といふような一つの意識的義務観念に近い概念に置き替へることが必要であらう。それ故、集団社会のあらゆるメンバーが、その集団の社会的行動規範や全成員に対して守るべき義務の観念をもつて社会連帯であると規定するならば、フェスラーの共同社会連帯の測定は、とくに一次的性格の強い農村共同社会において、そのメンバーのもつ連帯的義務観やそれに対応した行動態度の様相が、如何なる確泊状態をしめしているか、この点を計測する操作を意味するものとなるであらう。

もとより、かく断定する為には、フェスラーがその調査表において尺度として構成した尺度文章(質問事項)とその取扱ひ方がもつ社会学の意味を吟味する操作を加へてみななければならない。後にも論ずる如く四十項目にわたるフェスラーの尺度文章の意味内容は、いずれにしても或る社会的な価値観念や特定の普遍的な行動規範に対する連帯的義務観の意識的相互関係を把へようとするものが多く、社会的相互作用(行為)としての連帯関係を直接把へようとする項目は少い。もつとも、その様な偏向があつても、他面共同社会における相

互作用的な連帯関係の存否を間接的に扱へようとする項目が尺度中にみられるから、彼の尺度は連帯性の主体的側面と客体的側面とをほとんどよく融合させたものとみることも出来る。他方またまた、見方を変へれば、それは、連帯性の相互作用的側面と、社会的意識の連帯的側面即ち連帯感との混同を意味するものとも云へるのであつて、些か概念の明澄性に欠けるきらいはなしとしない。このことは何をもつて社会連帯の構成概念とするかについて統一論が展開されていないからである。しかし、現実には一つの現象に無数の要因がからみ合つているのであるから、はじめから要因間の函数的な意味関係を追求して行くことは無理であらう。とすれば、一応肯定される基準にとずいて標識をうちたて、それを尺度化して現実当てはめ、得られた資料を分析、吟味することによつて研究を進めることはむしろ止むを得ない方法とされる。それ故にこそたとえフェスラーの共同社会連帯の概念が、所詮測定のための一つの仮説的な嚮導概念であつて、本質概念との間に文脈のつかないきらいがあるとしてもそれは一応止むを得ないこととなるのである。

さて、以上の如き概念構成にもとずき、フェスラーは測定方式の設定に当つて先ず、コミュニティーの構成員から、連帯性の反映と見なされる意見の抽出を試み、それを尺度化する方法をとつた。即ち、彼は制度化されたコミュニティーの八つの社会的生活領域における行動を判断する総数五九の基準(criteria)を設け、これを試験さるべきコミュニティーを参考にして、肯定・否定の文章に翻案し、都合一一八ヶの文章(statement)に書き直し、一先ず連帯性測定の一次的な尺度を編成した。この場合、当該尺度文章は次の八つの社会的行動領域に亘つてゐる。即ち、

- 一、 共同社会の精神 (Community spirit) C. S.
- 二、 対人関係 (interpersonal relation) I. R.
- 三、 共同社会に対する家族の責任 (family responsibility toward the community) F. R.
- 四、 学校関係 (schools) S.
- 五、 教会関係 (churches) C.
- 六、 経済行動 (economic behavior) E. B.
- 七、 地方行政 (local government) L. G.

がそれである。次に、彼は八つの領域に亘るこの一一八の尺度文章をもつて、アイオワ州の農村高校生を対象として予備試験を実施し、各尺度文章について、*“very true”* (強く肯定) / *“true”* (肯定) / *“not applicable”* (曖昧) / *“untrue”* (否定) / *“definitely untrue”* (強く否定) の五つの意見表示のいづれか一つを瞬間的に求める反応試験 (応答試験) を行い、それぞれの段階の意見表示の反応に対して、5、4、3、2、1のスコア (基本点) を与へる方法をとつた。更にその後尺度文章についての内的一致性 (internal consistency) をテストし、一一八の尺度文章中妥当性の高い四〇の項目を残し、これを前記の八つの社会的行動領域に分類し、それぞれの領域における基準に対応させた。しかし四〇の尺度文章が果して一般の人々から最も良く受入れられるかどうかは判らないので、これを吟味するために、はじめの五九の基準項目を重要性の程度に応じて三つの段階に分ける作業を施し、各基準にスコアを与へ、また順位 (rank order) をつけた。このテストには一〇〇人のカレッヂの学生が動員された。その三つの重要性の段階とは次の如くである。即ち、

- 1 よいコミュニティーにとつて欠くべからざるもの
- 2 重要ではあるが、必ずしも不可欠ではないもの
- 3 重要でないもの

このような基準による重要性の rank order と internal consistency のテストを行つた結果、個々の尺度文章に対して得られた両者の得点相互間には、非常に高く重要な相関関係の存在することが認められた。フェスラーは更にこの基準が農村的性格をもつ妥当なものであるかどうかを吟味する為に、右のカレッヂの学生を出身コミュニティー別に分類し、それによつて予備テストにおける重要性のランクと、基準について得られた重要性のランクとの相関係数を求めた。その結果、農村出身の者はその基準の重要性に対して、都市出身の者より高い評価をしていることが判明した。従つてこれにより連帯性の標識が都市向けのものではなく、農村向けのものとして妥当な根拠が発見された訳である。

かくして、四〇の尺度文章が設定された後、フェスラーはこれを八つのコミュニティーに適用した。この場合コミュニティーの境界決定の問題が附带的に派生したが、この問題については彼は Iowa State Planning Commission が一九五三年に定めた Grocery Trade Area を

利用した。即ち、これを根拠として当該地域社会の商店がチエックされ、更にその社会範囲に住む農家の帰属意識を面接によつて確かめることによつて、調査における各コミュニティの境界を決定したのである。この様にして八つのコミュニティの一つ一つにつき、調査表より得られたスコアの「平均値」と「標準偏差」を、前記の八つの行動領域の各々について計算し、また総点数と標準偏差の総平均も計算されたのである。ここで「平均値」は、当該コミュニティの制度 (institution) に対して、どの様に考へているかといふ、一般的な意識の態様をしめしている。勿論制度化されたそれぞれの行動定型は一次的な農村共同社会内に限つて判断されるのであつて、それより大きな社会によつて作られた標準と合ふはぬは別問題である。従つて、そのコミュニティのメンバーによつて或る行動領域における慣習化された価値観念や行動規範に対して高い点数が与へられたときは、その価値的意味は肯定的に意識されていることになり、優勢となるが、逆に低い点数が与へられている時は、否定的に意識されており、その価値は劣つていふ事になる。次に「標準偏差」であるが、これはコミュニティのメンバー間に於ける、そのコミュニティの社会的行動についての合意の程度を統計的に表示することを意味する。従つて、否定的な意味に於いてまとまりがある時も、肯定的な意味においてまとまりのある時にも、いずれの場合においても兎も角まとまりの強い場合は、標準偏差は小さく出るのであつて、それが小さければ小さい程、人々の間における合意の程度——連帯性——も大になるといふことを意味している。

もし然りとすると、この調査表は、前述した如く、コミュニティのメンバー相互間における社会的行動(規範)に対する価値評価、或いは意識の統一性と、各コミュニティ内部における社会的行動に対する見解の一致性の双方を把へる尺度となつてしまふ。これに対してフェスラーは、「それが連帯性 (solidarity) の標識 (index) になるのは後者の意味に於てのみである」とつけ加へている。何故に後者の意味においてのみ、それが連帯性測定の標識になるかについては詳しい説明がないので、ここに先に述べた如く、測定概念を基礎づける理論上の疑問が残されるのである。この問題との関聯において、次に触れなければならぬ問題は、総スコアと平均標準偏差との関係である。この両者の相関度について、フェスラーは、既に行つたテストに於てはコミュニティのサンプル数が統計的に満足すべき相関度を得るには小さすぎたが、もつと大きな標本をとるならば、コミュニティのメンバーが或る社会行動を好ましいものとみればみる程、高い程度の連帯性を求め得る筈だと述べている。従つて、総点数と平均標準偏差との間に逆の相関関係が存在する場合、標識に妥当性を有す

る限りに於ては、それはサンプル・エラーに基く狂いと見るべきであり、逆に標本数が充分大きいのに逆の相関関係が成立する場合は、それは基準そのものが連帯性を捉へる標識として適當でないことを意味することになる。この問題を解決する為には、当該コミュニティーにおける他の測定の結果との間に何等かの相関関係を求めることよつて、標識の有効性を外的に吟味しなければならないが、フェスラーはもつと大きな標本に適用された後でなければ、この作業をすべきでない」と述べている。

フェスラーによる連帯性測定の構想は概ね以上の如きものであるが、彼は更に、測定の結果を图示する興味に値する手法を明らかにしている(2)。それによれば、四〇の尺度文章を前述の八つの行動領域に所屬分類せしめ、各領域をしめす八角形の図表を描いて、中心点から角までの距離はその領域の五つの尺度文章より得られた最高点、二五点を表はし、各取得スコアと標準偏差をその内側に示めすやり方である。即ち、八角形は時計廻りの方向に番号がつけられ、二時とところに、エリアⅧが、十二時とところに、エリアⅧが来る様にする。各領域における五つの尺度文章の平均値は放射線上に示され、その点と中心との間に一つの *Sigma Distance* が表示され、更に、その点(平均値)と八角形の外側のコーナーとの間に今一つの *Sigma Distance* が仕切られるのである。かくして、八つの領域における各点を結ぶことによつて正八角の中にゆがんだ八角形が作られる事になる。

フェスラーはこの八角形図表によつて次のことを明瞭にすることが出来ると云つてゐる。即ち、

- (1) 或るコミュニティーのスコアが、外側の八角形で示される理論上の完全スコアを有するコミュニティーにどれだけ接近しているかが判る。
- (2) 一つのコミュニティーにおける制度化された行動に対する各領域における差異が判る。
- (3) 各々領域においてどれだけの場合が存在するかが判る。

従つて形成される八角形がすべて釣合のとれた形をなしている時は、そのコミュニティーのメンバーの意見はあらゆる領域においてましまりがあり、しかもバランスのとれたコミュニティーであることを示めすが、反対に形成される八角形が歪んだ形をしている時は、大部分の領域における意見はばらばらであり、合意の程度も各領域において異なることを示めしている。かかる場合は成員の評価にバランスのみられないことを意味し、連帯性に欠けているといふ事になるのである。

フェスラーの測定方式についてはこの外にも若干述べるべき点があるが、その大綱は以上に尽きる。彼はこれをアイオワ州において、農業協同組合のある農村と、ない農村とにおける社会的相異を捉へるために作成したのであるが、その測定結果によれば、協同組合のある農村の方が、ない農村よりも連帯性の高いことが認められたと述べている。しかし連帯性をめぐって何故にかかる違いが認められるのか、その基礎的な原因については説明が与へられていないのである。

註(1) 四〇の連帯性測定の標識即ち「尺度文章」の一々については紙面の関係上、掲載を省略し、左に八つの行動領域における、その一例を掲げる。

- 1 G.S. 「この部落の人達は、この部落が他人からどんな風にみられても平気である」
 - 2 F.R. 「この部落の人達は自分の家族を部落の年中行事に参加させるのに熱心である」
 - 3 I.R. 「私はこの部落の一員であつたことを大変よかつたと思ふ」
 - 4 S. 「この部落の学校の生徒達は皆勉強に熱心である」
 - 5 C. 「宗教を信じている人が、案外、教へを忘れ勝ちだといふことはない」
 - 6 E.B. 「部落(市街地)の店屋は誰にでも公平にサービスしてくれる」
 - 7 L.G. 「少数の人達が村政を牛耳っている」
 - 8 T.A. 「この部落は非常に平和で秩序正しい」
- (2) 八角形図表による表示については、後掲第一図参照

三 開拓部落への適用とその測定結果

先にも述べた如く、フェスラーの連帯性測定尺度は、アイオワ州の一次的農村を素材として構成されたものであり、従つて生活様式を異にする北海道の農村社会にこの尺度を直接適用することは適當ではない。また彼自身が述べている如く、この尺度は必ずしも完璧なものではないし、どの社会にも適用出来る程の Universality を持つものでもないから、北海道への適用に當つては可成りの修正を必要とする事は云ふ迄もない。しかし、この尺度が如何なる点において難点があり、しかもそれをどの様に修正すれば適用可能となり、ま

た妥当性も高まるかといふ問題については、一度これを試行的に実際に適用し、所謂試行錯誤 (Trial and error) の方法によつて処理することも一つの方法と考へられる。幸い彼の尺度項目それ自体に全然普遍性がないとも限らないので、かへつてこの尺度をもつて、対象を異にする北海道の開拓部落の如き一次的な農村共同社会に適用してみた方が、その効能を一層はつきりさせることが出来るかと考へられる。

かかる見地に基き、吾々は北海道における開拓部落中、一次的農村共同社会 (primary rural community) の性格を顕著に有する七つの開拓部落と、比較の素材として同様に一次的性格の強い四つの既存農村につき一九五三年より本年にいたる迄の六年間、調査対象農家戸数、三七九戸について、その試行調査を行つた。調査に當つては、各部落ともに母集団の規模が小さいから悉皆調査を旨とし、対象は原則として世帯主に限定した。

今、その調査対象地点及び農家戸数を列挙すれば次の如くである (第1表)。

さて、試行調査に當つて、最初に考慮しなければならなかつた問題は、尺度文章の妥当性 (validity) の問題である。即ちフェスラーが定めた四〇の尺度文章は、吾々が知ろうとしている本道の開拓地における農家の連帯性を的確に把握できる性質のものでなくてはならないが、果してその様な妥当性が存在するかといふ疑問である。妥当性については外的標識を予測し、或る外的規準と当該尺度との相関係数を求めることによつて判断する方法があるが、連帯性の如き概念においては客観的に外在する規準の存在は考へられないのでこの方法は無理である。即ち連帯性は一つの観念的に考へられる質的特性であつて、妥当性の規準となるべき外的規準の如きものはない。また既に妥当性をもつていることが立証されている同種の尺度も他に見られない。そこで結局尺度項目の妥当性は、一群の判定者の理論的常識的判定にまつといふ事と、内的一貫性 (internal consistency) によつて吟味するより外はない。しかし四〇の尺度文章はフェスラー自身が一定の基準と操作によつて検証した結果妥当性のあるものと認めて残した項目であるから、ここでは北海道の農村事情との関連において、妥当性を判定し、それによつて修正を施すことからはじめねばならない。判定の結果、八つの領域に亘る四〇の文章の中で、表現の適切でないもの、生活様式の相違から修正すべきもの等が五項目あつた。今その修正事由を列挙すると次の如くである。

1 学校関係の「文章」では、学校教育制度に違いがあるから、college は「上級学校」、「入学」は「卒業」と修正した。

第1表 調査地点及調査農家数

開拓部落名		所 在	母集団実数	調査農家数	調査年度
大与地	開拓部落	十勝・足寄町	42戸	29戸	S. 31年
岩尾別	〃 〃	斜里・知半島	33	17	S. 〃
鬼志別	A 〃 〃	天 北	35	23	S. 32年
新内	〃 〃	十勝・新得	15	11	S. 〃
共和	拓北	十勝・大樹	41	34	S. 28年
ニセパロ	マナイ	上川・土別	24	21	S. 33年
計		-	190	135	-

既存農村名		所 在	母集団実数	調査農家数	調査年度
前田	村村	後志・岩内	4 部落	83戸	S. 29年
登足	村村	後志・岩内	2 部落	54	S. 〃
仁木	村村	後志・大江	1 部落	30	S. 〃
大野	村村	函 館	2 部落	77	S. 30年
計		-	-	244	-

遊離している為、解答者を当惑させると思はれるものが若干あつた。例へば「この部落の宗教団体はお互にうまく折合っている」といふ文章において、開拓地には宗教団体のない所があり得るので、解答者をして返答に当惑を余儀なくさせるが如くである。この種の問題については適宜「部落」を「村」に切替へる等して或る程度の解決策を講じた。

かくして、測定的前提として必要な最少限度の吟味と修正及び補完工作を施した後、上記の調査地点に於て実測を試みたのであるが、

2 宗教関係の「文章」では、宗教制度に相違があるので、「教会」を「お寺や教会」とした。また家族関係の領域で、「家族を日曜学校や教会に行かせる」といふ文章を「村の年中行事に参加させるのに熱心である」といふ風に改めた。

3 緊張関係において「仮に悪い国籍に属しているとしたら、不幸な目に合せられている」といふ文章があるが、「これを仮に貴方が日本人でないとしたら……」と改めた。

さて以上の操作は効果に対する予測的修正の一つである。この修正そのものが果して妥当であるか否かに疑問はあるが、経験的常識的に見て、一応は許容されるものと考へられる。次に四〇の尺度文章の配列の問題がある。吾々のプリ・テストに於ける面接に於ては、原文の配列は非常に聴取りにくかつたので、これを改め、学校関係から聴取る様にした（原文では経済関係）。この外、文章の作成・配列に当つては、サーストン(D. L. Thurstone)が態度測定尺度の作成に当つて指摘した五つの要件にもとずき必要な吟味と配慮を加へた結果、尺度文章の内容が開拓地の実態と

第2表 開拓部落における連帯性の測定値

開拓地名 及 総スコア	領域別 項目	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	平均
		C. S.	I. R.	F. R.	S.	C.	E. B.	L. G.	T. A.	
十勝 大与地 117.0 (29戸)	平均	15.8	16.6	13.8	14.6	14.6	15.0	13.7	13.7	14.7
	S. D.	2.90	2.55	2.44	1.82	1.82	2.56	3.01	2.11	2.40
	集中点	3.2	3.3	2.8	2.9	2.9	3.0	2.7	2.7	2.9
	s. d.	0.58	0.51	0.49	0.36	0.36	0.51	0.60	0.42	0.48
知床 岩尾別 119.3 (17戸)	平均	16.1	16.2	15.5	12.1	14.4	15.9	15.3	13.8	14.9
	S. D.	2.43	2.28	2.12	2.94	1.38	2.40	3.31	3.11	2.50
	集中点	3.2	3.2	3.1	2.4	2.9	3.2	3.0	2.8	3.0
	s. d.	0.48	0.45	0.42	0.59	0.76	0.48	0.66	0.61	0.50
天北 鬼志別 117.0 (23戸)	平均	16.2	14.3	15.0	13.1	13.3	15.8	15.3	14.0	14.6
	S. D.	1.58	1.76	2.55	2.05	2.10	2.06	2.56	2.56	2.15
	集中点	3.2	2.8	3.0	2.6	2.7	3.1	3.0	2.8	2.8
	s. d.	0.32	0.35	0.51	0.40	0.40	0.40	0.50	0.51	0.43
十勝 新内 117.9 (11戸)	平均	15.5	14.5	16.6	14.7	13.2	16.2	13.8	13.4	14.7
	S. D.	2.81	1.03	3.01	2.82	1.60	1.62	1.99	2.06	2.12
	集中点	3.1	2.9	3.3	2.9	2.6	3.2	2.8	2.7	2.9
	s. d.	0.56	0.21	0.60	0.56	0.32	0.32	0.20	0.41	0.42
十勝 共和 120.0 (18戸)	平均	17.5	14.6	16.0	16.0	15.1	13.8	12.9	13.2	15.0
	S. D.	3.47	2.32	2.28	3.46	1.76	3.25	2.92	3.13	2.82
	集中点	3.5	2.9	3.2	3.4	3.0	2.8	2.6	2.6	3.0
	s. d.	0.69	0.46	0.45	0.69	0.35	0.65	0.58	0.63	0.56
十勝 拓北 125.9 (16戸)	平均	19.2	15.7	15.9	17.9	14.4	14.8	14.6	13.4	15.6
	S. D.	2.43	2.71	2.52	1.18	1.69	3.61	2.60	2.08	2.48
	集中点	3.8	3.1	3.1	3.5	2.9	3.0	2.9	2.7	3.1
	s. d.	0.49	0.54	0.50	0.44	0.34	0.72	0.52	0.42	0.50
上川 ニセバロ マナイ 116.8 (21戸)	平均	15.6	15.8	15.0	14.1	13.3	15.0	14.3	13.7	14.6
	S. D.	1.91	1.40	2.81	2.27	2.46	2.18	2.54	2.57	2.27
	集中点	3.1	3.1	3.0	2.8	2.7	3.0	2.9	2.7	2.9
	s. d.	0.38	0.28	0.56	0.45	0.49	0.44	0.51	0.51	0.45
総平均 119.3 (135戸)	総平均	16.6	15.4	15.8	14.8	14.0	15.2	14.3	13.6	14.9
	S. D.	2.70	2.00	2.53	2.51	1.83	2.53	2.70	2.52	2.39

今その一次的集計作業によつて得られた結果を列記すると第2表の如くである（前頁参照）。

これによると、七つの開拓地（部落）における総スコアの平均は一一・九・三点であつて、大与地、ニセバロマナイ、鬼志別、新内は平均以下の一一・七点代であり、岩尾別は平均と同じで、共和、拓北、では、順次に平均より高い点数をしめた。しかしこの総点数は連帯性を直接反映する数値そのものではなく、肯定否定の傾向を示めず指数にすぎない。理論的には二〇〇点が肯定による最高点であり、四〇点が否定による最低値である。従つて平均一一・九・三は、概ねその中に当る数値であるが、さればとて、肯定否定の中間即ち *neutral* を示めすものでもない。連帯性を表示する指数は、既に述べた如く各領域における平均スコアと標準偏差（S.D.）との関係において見られるのであるから、総スコアにたよることは意味がないのである。

そこで今、フェスラーの手法に従つて、八つの領域における連帯性の指数を部落別に図示してみると第1図の如くなる。

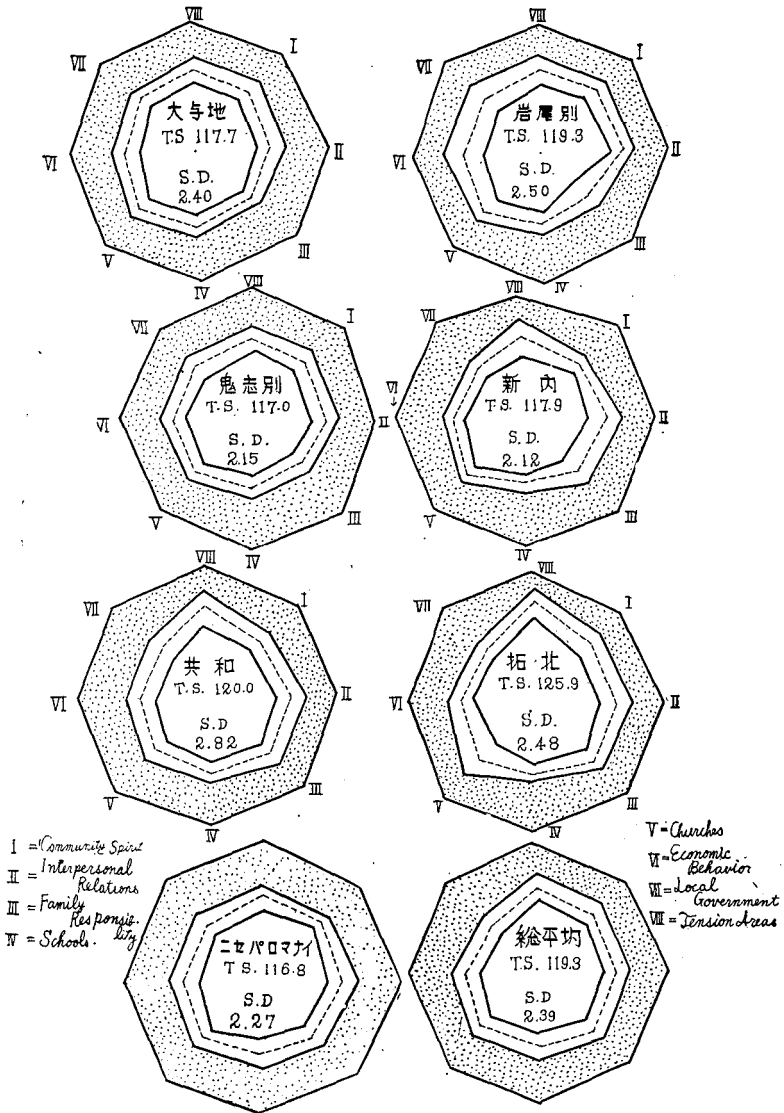
これにより、今総平均の八角形を基準として七つの八角形を比較検討してみると、比較的円満な連帯性を保持しているのは新内、鬼志別、ニセバロマナイの三地区である。これに対して共和、拓北はイガ栗状の八角形をしめして低い連帯性を示している。又大与地・岩尾別・共和では八つの領域ともに、最も意見のばらつきがはげしく、連帯性に欠けていることが判る。更に、領域別には新内を除けば、いずれの開拓部落も「経済行動」「地方自治」の面における連帯性に欠けていることが明白に視はれる。しかれば、この傾向は開拓部落に特有のものであろうか。

今比較の素材として、既存農村における連帯性の測定結果を掲げると、第3表の如くである。紙面の関係上、集中点及びその数値は省略する。

第2表と第3表における総平均の欄を比較してみると、既存農村でも、「経済行動」及び「地方自治」の二領域における連帯性は他の領域におけるそれよりも低いことが判る。ことに既存農村における「地方自治」の領域における連帯性は最低であり開拓部落におけるそれよりも遙かに低く悪い。これによつて、いずれにしても、このE・B・とL・C・のエリアにおける連帯性の低位性は開拓部落に固有の現象ではなく、本調査に関する限り本道農村に通有の現象と見られる。これ等特色については後に改めて論ずる。

次に全体として、開拓部落における連帯性と、既存農村におけるそれとを比較してみると、仁木、発足、大野の既存農村では八角形の

第 1 図



第5表 既存農村における連帯性の測定値

農村名 及 総スコア	領域別 項目	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	平均
		C. S.	I. R.	F. R.	S.	C.	E. B.	L. G.	T. A.	
仁 木 <u>123.7</u> (30戸)	平均	17.0	16.9	15.8	17.9	14.7	15.3	12.8	13.3	15.5
	S. D.	1.63	2.06	1.78	2.14	2.64	2.30	2.81	2.23	2.20
前 田 <u>121.9</u> (83戸)	平均	16.3	15.3	17.5	17.3	14.8	13.6	13.3	13.8	15.3
	S. D.	2.09	2.06	2.34	2.28	1.91	2.03	2.35	2.23	2.16
発 足 <u>120.8</u> (54戸)	平均	16.3	15.9	17.9	16.0	14.6	13.2	12.7	14.2	15.1
	S. D.	2.44	2.74	2.99	2.30	2.25	2.96	3.03	2.78	2.69
大 野 <u>122.9</u> (77戸)	平均	17.5	16.4	15.2	17.5	14.4	14.3	13.2	14.4	15.4
	S. D.	2.81	2.59	2.47	3.26	2.28	2.30	3.42	2.67	2.73
総 平均 <u>122.3</u> (224戸)	平均	16.8	16.1	16.6	17.2	14.6	14.1	13.0	13.9	15.3
	S. D.	2.24	2.36	2.40	2.50	2.27	2.40	2.90	2.48	2.44

IからIIIの領域限にかけて、スコアが高いが、他の領域限では反対にスコアが低い。尤も八つの領域の平均では、既存農村仁木、前田は連帯性がやや高く、開拓部落の平均より上廻るが、大野、発足では開拓部落の平均値より低い。そして共和、拓北の如く、入植以来二十五年にも及ぶ開拓部落を除くと、全体としては既存農村の方が一般開拓部落におけるよりも連帯性が相対的に低く、開拓部落の方が逆に連帯性が高いことが判る。このことが果して絶対的傾向であるか否かは、早計に断ずることは出来ないが、本調査では一応その傾向が顕著に現はれるのであつて、特記に値すると云はなければならぬ。この傾向の正当性を確認する為には、更に測定の結果を精密に分析しなければならぬので、次に以上の数値を分析した結果を明らかにしたい。

四 「連帯度」の算定による

結果の分析

前節において、吾々はフェスラーの八角形図表によつて開拓部落及び既存農村における連帯性の測定結果の表示と比較を試みた。この視覚に訴へる方式による結果の表示は一応彼の独

想による表現方法として興味に値するものがあるが、しかし乍ら、この方法は結果を比較分析する方法としては必ずしも充分なものとは云い難い。勿論この表示法は、全体としてのまとまりの程度を概観するには極めて便利であるが、それも二、三の部落を比較する場合に限られ、また或る程度サイズの大きな八角形を書かなくては八つの領域における各々のニュアンスを表現しきれないといふ欠点をもつてゐる。従つて本調査における如く、調査部落（地点）が、開拓地・既存農村合せて十地区にもほる場合においては、それぞれの比較が困難であり、また各領域別にデテールを詳細に描写し、かつ比較分析することは一層困難である。また先にも述べた如く、連帯性が、取得スコアと標準偏差との両者によつて相関的に決まるものとすれば、これを最終的に一つのまとまつた単位によつて表示しなくては、それぞれの調査対象部落における連帯性の相対的優劣を判じ難いことになるし、また各「領域限」についても同様のことが云へるのである。

そこで私はこの欠点を補ふ為めに、独自の方法により新しい「単位」を設定することにした。「連帯度」(Solidarity Ratio)がそれである。そのやり方は標準偏差 (s.d.) の二乗とスコアを対比させて、その比率が一对一になる点をもつて連帯度の相対的ゼロ点を固定する方法である。連帯性はスコアと S.D. との関係作用によつてきまる。この関係作用においては、一般にスコアが高い場合と低い場合とにおいて、S.D. が等しい場合は、高い時の方が肯定的傾向における連帯関係が強く、より好ましい連帯性の存在が認められるが、逆の場合はまとまりが悪く好ましくない連帯性の存在を意味するし、またたとへスコアが高くとも S.D. が大きい場合は、スコアが低く、S.D. が小さい場合よりも連帯性に欠けるといふ理論的關係がみられるから、これを満足させる単位を構成すればよい。「連帯度」なる単位はかかる要請に應へるものとして構成されたものであり、それは本調査研究に関する限りに於て有効なものであり、フェスラーの与へなかつた概念であるから、誤解をさける為にはこゝではとくに Solidarity Ratio K といふ表現をしておく。今、連帯度の算出公式を掲げると次の如くである。即ち、

$$\text{連帯度 (Solidarity Ratio K)} = 1 - \sqrt{\frac{\text{sd}^2}{\text{score}} \dots (\text{S. R. K})}$$

これは分散の程度をスコアと対比させ平方に開いて 1.0 よりマイナスし当該指数を求めるものであつて、1.0 が最高であり、比較的簡単に計算出来るばかりでなく、連帯の程度を最終的に表はすのに極めて便宜である。

今、開拓部落別、領域別にこの連帯度を計算した結果を示めすと第 4 表の如くであり、これを図表で表はすと第 2 図の如くなる。また

第4表 開拓部落別・領域別連帯度

SRK = 1max

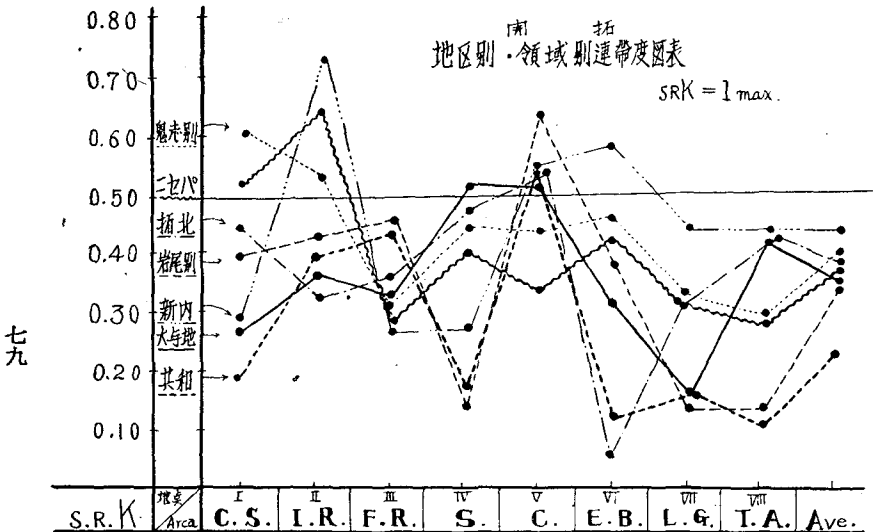
領 域 部落名	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	平 均
	C. S.	I. R.	F. R.	S.	C.	E. B.	L. G.	T. A.	
大 与 地	0.270	0.373	0.343	0.524	0.524	0.340	0.187	0.430	0.374
岩 尾 別	0.395	0.434	0.462	0.155	0.636	0.398	0.154	0.163	0.352
鬼 志 別	0.608	0.535	0.342	0.438	0.424	0.482	0.356	0.316	0.437
新 内	0.286	0.730	0.261	0.265	0.560	0.598	0.464	0.437	0.447
共 和	0.192	0.393	0.430	0.158	0.547	0.125	0.187	0.139	0.249
拓 北	0.445	0.316	0.368	0.485	0.555	0.062	0.320	0.431	0.376
ニセパロマ ナイ	0.515	0.648	0.274	0.396	0.325	0.437	0.328	0.306	0.406
総 平 均	0.337	0.491	0.355	0.348	0.511	0.351	0.286	0.317	0.381

第5表 4 既存農村の平均連帯度

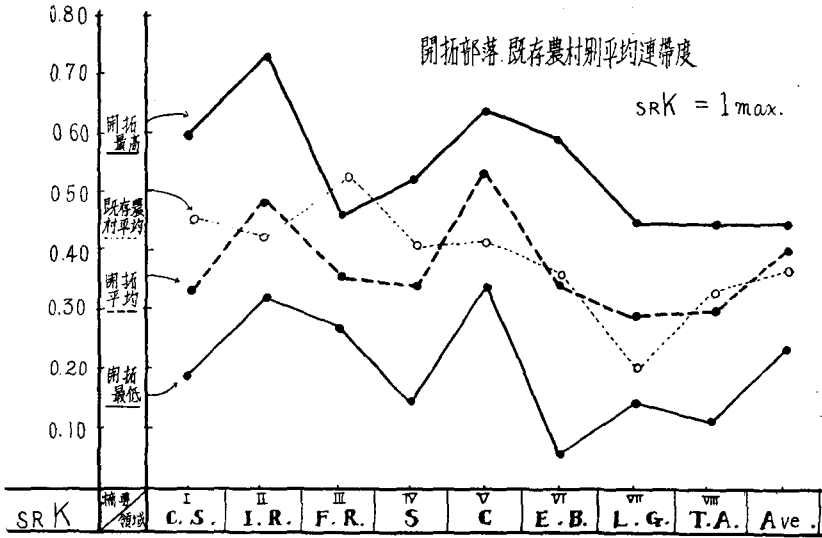
SRK = 1max

領 域 部落名	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	Ave.
	C. S.	I. R.	F. R.	S.	C.	E. B.	L. G.	T. A.	
仁木・竈足・ 前田・大野 (平均)	0.458	0.412	0.503	0.396	0.406	0.361	0.196	0.335	0.376

第 2 図



第 3 図



比較を容易ならしめる為に、七つの開拓部落についての連帯度の総平均と、四つの既存農村におけるそれとを領域別に図示すると第3図の如くなる。

これによれば、開拓部落における連帯性の特色として次の諸点を指摘することが出来る。即ち、領域別には、

- (1) C.S. (Community Spirit) ……この面に於ては大与地、共和、新内が低く、全体としてみても、この領域では既存農村の方が開拓地よりも連帯度が高い。共同体意識の面に於てかくの如く開拓地の方が既存農村におけるよりも低いのは開拓地の社会が新しく、人的結合や集団関係、或いは土地そのものに対する結合觀念に強度が稀薄な為である。
- (2) I.R. (Interpersonal Relations) ……この領域においては第8図においても明らかなる如く、肯定度が最も高い。ことに「新内」は0.730の連帯度を示しており最高であり、この外ニセバロマナイ、鬼志別も高く、概して開拓地における対人関係の面における連帯度は高い。これは開拓社会の人的構成が比較的単純であり、社会的地位にも相互に極端な格差がみられないために、好ましい関係が維持されている為と思はれる。

(3) F.R. (Family Responsibility) ……家族としての責任感の面においては、どの開拓部落でも連帯度は低い。これを既存農村に比較してみると0.355に対して既存農村は0.503であつて、開拓部落は可成り低い。これは、様々の理由によると思はれるが、その一つに開拓農家の内的生活

が日々の労働に追はれて、充分顧みることが出来ないといふ事と、出身地を異にするものが多く、家庭生活の規範、慣習を異にする為とも思はれる。

(4) S. (Schools) ……学校に対する連帯度は、開拓地の方が既存農村よりやや劣る程度で、大差はない。既存農村の方が小学校や中学校については既に安定した状態にあるから指数もやや高くなつて出るのは当然肯首される。

(5) C. (Churches) ……ここでは宗教団体について調査したが、開拓地には宗教団体が存在しないし、又之に対する関心も著るしく稀薄であり、調査に於ては、「判らない」と答へるものが極めて多く、その為に0.51といふ可成り高い指数を得た。従つて、この数字には、測定上の疑問があるので信頼出来ないから問題外とする。但し既存農村の場合はその限りでない。

(6) E.B. (Economic Behavior) ……この面においては、「新内」を例外とすると、開拓地の連帯度は可成り低い。また、既存農村におけるB. E.の連帯度も開拓地同様決して高いとは云い得ない。このことは経済行動についての価値観念について農村では統一性がなく、銘々勝手なことを考へ勝であることを意味するものとして注目に値する。ことに「拓北」では、開拓以来二五年の歴史を有するにも拘らず、0.082といふ最低の連帯度をしめしたといふ事は、開拓者が一応安定した後においても、その營農經濟観に如何に統一性がないかをしめすものとして注意に値する。

(7) L.G. (Local Government) ……地方自治や、地方行政に対する観念においては、最も大きな問題を内在せしめている。ここでは役場の行政施策や農政を反映せしめているが、「新内」を除くと、開拓地では不満が多く、連帯性に欠けると云へる。しかし既存農村の方は開拓地よりも、遙かに悪く、その連帯度は平均僅かに0.186であつて本調査中、最低である。この数値は開拓地の岩尾別(知床)共和(大樹)大与地(足寄)のそれに比敵するものであつて、農村における一般的傾向とも見られる。とくに既存農村では村政、町政に対して、可成り非連带的な意見が存在するといふことは、今後、行政の当事者としても注意を要する。これは、役場のP. R.によつて或る程度改善することが出来ると思ふが、また反面、農村的なボス行政の潜在を示唆するものでもあろう。

(8) T.A. (Tension Areas) ……对人的な緊張関係についての意見の連帯度は、開拓地、既存農村共に略々同等である。しかし、I. G.と共に、その程度は可成り弱い。ここでは、「部落への仲間入り」、「男女関係」、「もの判りの程度」、「葛藤関係」、「人種差別」

等が聴取の素材とされているが、大字地、新内、拓北ではややよいが共和、岩尾別ではあまりよくない。これは人間関係をめぐる意識の近代化、社会化が遅れている為であつて、この傾向は開拓地の方が既存農村よりやや顕著である。

(9) 之を要するに、既存農村との比較に於て、開拓地の連帯度は、共同体精神 (C. S.) 家族に対する責任感 (F. R.)、学校教育 (S.) の三領域に於て劣つており、既存農村では対人関係 (I. R.) 宗教団体 (C.) 及び地方自治 (L. G.) の三点において開拓地よりも低い連帯度をしめしている。また経済行動 (E. B.) 地方自治 (L. G.) 緊張関係 (T. A.) の三領域における連帯度は、開拓地、既存農村共に可成り低く、本道農村における連帯度をめぐる一般的特色を形成するものとみられる。

(10) 共同体意識は開拓地によつて連帯度に可成りのちがひがあり、本調査では、そこから一般的傾向を誘引することは出来ないが、概して、対人関係が円満で、纏りの強い部落ではこの C・S の連帯度も高く、社会的経済的立地条件の劣悪性、開拓地の新旧には直接影響されないものとみられる。尚新内開拓地は、開拓農家と既存農家とが調査対象に混在しているので、他の開拓地にはみられない特異な連帯度がみられる。

測定結果の分析によつて得られる産物はもとよりこれに尽きるものではないが、ここでは主として地点別・領域別に見られる特色の主なるものについて明にするにとどめる。

五 結 論

以上本稿においては、フェスラーの共同社会連帯の測定方式を明らかにし、これを本道の開拓地における七つの部落に対して試行的に適用した結果を明らかにし、又既存農村における測定を併行することによつて、両者の比較分析を行つた。とくにここではフェスラーの与へなかつた「連帯度」の算出方式を創定したことによつて、事象の一次的比較を容易ならしめる措置を講じたが、このことがフェスラーの方式を一步前進発展される一助になれば幸と思つている。しかし乍ら、この測定に於ては未だ多くの疑問とされる点並びに解決しなければならぬ問題が多されている。例へば尺度文章の選択構成、内容等にしても、今回の試行調査においては許容出来る最低線の範囲内にとどまるものであり、決して最適のものとは云い難い。このことは尺度文章の内的一貫性の検定によつても提起される問題であ

り、二系列相関による検定の結果、妥当性の低い若干の項目が、「宗教団体」「学校関係」等の領域に発見された⁽¹⁾。また子供がない家庭の多い部落とか、通学児童の少ない部落、或いはジェネレーションが若い為結婚適令期にある子女をもたない開拓地等々において、解答（反応）を予期出来ず、非反応現象を生ずる様な尺度文章なしとしなかつた。この様なことは概して既存農村にはあり得ないが、開拓部落の如く、社会的に特殊な性格をもつた社会に於ては当然生ずる事柄であつて、これを如何に解決するかが一つの問題として残されるのである。これ等の問題はもとより引続き究明さるべき課題の一例に過ぎないが、本稿では都合で取扱はない。この外、調査時点のずれの問題がある外爾後的分析に於ても、調査対象農家の部落居住期間の長短、センター迄の距離、経営形態の特色或いは階層的地位等々の外的要素をファクターに取り、これとクロスさせて、連帯度の特色を分析する仕事が残されている。しかし本稿では、これも今後考えすべき課題として、触れなかつた。

之を要するに、フェスラーの連帯性の測定には多くの問題を含んでいるが、一応これによつて、連帯意識という社会的事実の或る側面を把握ることが出来ると思ふ。ただそれが、所論の目標である開拓部落の連帯性をとれだけ適確に把へているかその理論的基調においては依然疑惑を払拭し得ないものがある。またフェスラーが領域別に連帯性を把へようとした意図は了とされるが、しかし乍ら、所詮各領域が何を意味するかその概念内容が明確でない為、爾後的分析に於て適確なる判断と説明を与へ難いといふ難点を指摘しておかねばならない。かくの如く、フェスラーの共同社会連帯の測定には、概念構成の面に於ても、測定方式の面に於ても、更にまた結果の分析に際しても、尚考慮しなければならぬ多くの問題を含んでいるが、しかし、将来これを更に発展させて、妥当な尺度を構成する可能性は残されている。本研究は未だ試行的適用の域を脱しないが、今後の、諸賢の御批判と叱正を乞ふ次第である。

註(1) 二系列相関による項目の妥当性の検定、スピアマン・ブラウンの方式による信頼度の検定および要因分析の結果については、紙面の都合上表示を省略した。

(2) 例へば、尺度文章中に、「男女関係の事で悩んでいる若い人は多い」といふのがあるが、開拓部落の世代が若い場合は、該当者がいないから、反応を示めし得ない。同様の非反応現象が他にもみられる。

(一九五八、一一、二七)